福山市議会・水曜会　平成25年　5月号

ゆうすけ通信

vol.12

発行責任者／福山市議会議員 大田 祐介
後援会事務所／〒720-0825
福山市沖野上町3-6-33
TEL:084-932-7855
FAX:084-921-8801

ふくやまマラソンに参加した水曜会のメンバー

着物日和★鞆にて

戦没者の遺骨収容について

タクロバン市の慰霊公園

経済リポート H24.6.1「祐介の目」

私の母は8年前の5月20日にエベレスト登頂後、下山中の8500m地点で遭難し、遺体は現在もそこに安置してある。今でも「収容できないのか?」と尋ねる方がいるので説明するが、「ヒマラヤでは8000m以上をデスゾーンと言い、そこで遭難した場合は回収を諦めるのがルール」。将来、高性能のヘリコプターが開発され、安全に現地まで行ける時代になれば収容したい。

日本人ほど遺体や遺骨に執着心の強い国民はいないと考えている人が多い。現に東日本大震災においては海底や、川をせき止めて川底の遺体捜索まで行った。しかし、アメリカにも過去の紛争（第二次大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争・湾岸戦争等）の際、行方不明になったアメリカ人について調査をするための戦時捕虜行方不明者調査隊（JPAC）がある。JPACはおよそ400人で構成され、毎年世界各地を調査し、行方不明のアメリカ人の遺骨が埋葬されていると思われる場所を探して発掘作業を行っている。遺骨が回収されると、世界最大の法医学系人類学研究所であるJPACの中央識別研究所に運ばれる。ここで身元識別を試み、アメリカ人の身元が特定されると、遺骨は軍礼とともに遺族に返還されるのだ。

対して日本は未だ南方を中心に約百万柱の遺骨が眠っていると言われながら、戦後復興にかまけて戦死者の遺骨をなおざりにしてきた。この問題を提起すると「今さら」という反応が多いことにも驚く。それにしても、戦死者に対して礼を尽くしてもらえない我が国で、今後いったい誰が国のために殉ずるというのか。

昨年、私は「福山歩兵第四一連隊」の激戦地跡をフィリピンのレイテ島の山中に発見した。関係者に問い合わせたところ、戦後、遺骨収集団が調査した記録は無い。おそらく多くの遺骨や遺品が眠っていると思われるので、資金協力や姉妹都市のタクロバン市を訪問して現地調査に協力いただける方がいればご一報いただきたい。私達の世代で戦後の清算を済ませたいものだ。母の遺体も孫が収容してくれることだろう。

変革する福山市議会

議場に国旗を掲揚

経済リポート H24.7.1「祐介の目」

改選後の6月市議会・本会議から一問一答方式での質問が始まった。しかし、マスコミの報道は賛否が分かれ、中国・読売・山陽の3紙は「分かりやすい」という傍聴者の意見を掲載した反面、朝日は「活発な議論はみられなかった、毎日は「一々発止みられず」と批判的であった。国会における議論と比較したようだが、国会は閣僚（与党議員）と野党議員による議論であり、敵・味方の関係にあるから白熱もするし、揚げ足取りもする。対して地方議会は行政職員（官僚）と議員による議論であり、その筋の専門家と対等に議論するには冷静さが必要であり、何も大声を上げ、机を叩くことが一々発止ではない。いかに良い答弁を引き出し、良い方向に市政を向かわせるかが議員の仕事だが、朝日や毎日の記者には理解できなかったようだ。

ところで今議会で最も議論が分かれたのは「震災がれき問題」であった。受け入れるべきという議員、受け入れるべきでないという議員、受け入れは現実的でないという議員と3派に別れた。私は最後の意見だが、その根拠を一般質問の質疑において以下の4点明らかにした。①広域処理を必要とするがれきの量が当初見込みより4割も減った②被災地における処理体制が整ってきた③焼却灰を埋める最終処分場からの浸出水を数十年にわたり監視する必要がある④福山までの運搬コストはトン当たり7～8万円かかる。これらを受けて市長も受け入れは「未定」とした。

そして6月議会最終日に議会として国に対し「意見書」を提出した。議員それぞれの考えは違うが、共通した思いとして「国ががれきの広域処理を推進したいのであれば、安全性に対して説明責任を果たし、問題が発生した際には事後責任を取ると確約するべき」という内容だ。ところが、これをがれきの受け入れを推進する意見書と理解した議員もおり、全会一致で賛成とはならなかった。賛否の分かれる問題は曖昧にしておくことも政治手法かもしれない。

競馬場の跡地問題

経済リポート H25.2.1「祐介の目」

ふくやま競馬が3月末で廃止が決定されるやいなや、跡地の活用はどうなるのかという話題が巷やネット上で沸騰した。中には大手ショッピングモールと市長の密約が成立しているという噂もまことしやかに流されていた。しかし、競馬事業が続行されている現段階で跡地利用が決定されたかのような風評は、競馬関係者に対して甚だ失礼ではないかと感じる。

市中心部に残された15haという広大な跡地利用については、時間がかかっても慎重に検討するべきだろう。今後発生する費用として、約19億円の赤字の一般会計からの補填、関係者に対する補償、施設の解体撤去費用等、約40億円程度が見込まれている。跡地を売却してその費用を捻出すれば良いという意見も当然出るだろうが、私はこの土地を売らずにどのように活用するかが、福山市の将来を大きく左右すると考えている。できれば多くの市民が集える場所・施設とし、賑わいあふれる拠点としてほしいと思う。

まず、噂のショッピングモールが進出した場合は確かに賑わうだろうが、既に市内はオーバーストアの状態にあるため既存店と競合し、駅前もますます寂れるだろう。住宅地にしたとしても、賑わいの創出には繋がらない。では市内に足りない賑わいの創出施設は何かと考えると、スポーツ施設等の「広場」が挙げられる。体育館や武道館は老朽化しており、建て替え場所としても良い。芦田川河川敷と隣接していることからマラソン大会の発着点としても良いだろう。

以前にも触れたが、新たな公共交通としての路面電車の結節点としても有望ではないか。ドイツ・フランスでは中心部から車を排除し路面電車（トラム）によるまちづくりを進めている。まちづくりは長い年月を要する総合的な作業であり、歴史・市民意識・財政・政治・文化・技術・経済等、考慮しなければならない要素は多い。しかし、今こそ「住みよいまちづくり」とは何か、真剣に考える時期だろう。

芦田川河口堰で潮汐発電

フランスのライン川を堰止めた水力発電所

経済リポート H25.4.1「祐介の目」

3月議会の一般質問にて、芦田川河口堰の開放（案）を提案した。河口堰からの工業用水取水量は年々減少して5～6万トン／日だ。河口堰を開放するとすれば、その代替水源を芦田川浄化センター（箕沖にある下水処理場）から海に放流される処理水を膜処理し、工業用水としてリサイクルするのが第1段階だ。この下水処理場の処理水は日量8～10万トン、晴天が続いても涸れない。シンガポールでは上水道の水源の3割をこの再生水で賄っており、技術的には確立されている。ただし、膜処理にかかるエネルギー（電力）の課題があり、水資源の豊かな日本ではコスト面で現実的ではない。

そこで、第2段階として、もし河口堰を開放できれば、日本で2番目の潮汐差（1位は有明海）を活用した潮汐発電に取り組んではどうだろう。河口に潮が満ちると堰を閉じて、堰の左端にある流量調整ゲート内にタービンを設置すれば発電が可能と思われる。河口堰は満水で400万トン、これが1日2往復するので、毎日約800万トンを放流することができる。潮汐発電は海外ではかなり普及しており、干潮・満潮時刻や潮位も予測できるため、計画的な発電が可能だ。国内では潮汐差の大きな海域の河口や湾を堰止める建設コストが多額なことにより実現していない。ところが芦田川河口堰はまさにその要所に建設されており、災い転じて福となすと言える。

第3段階は、河口堰潮汐発電所により下水処理水再生プラントにかかるエネルギーを賄い、余れば売電して年間5億円かかっている河口堰の維持管理費も賄いたい。河口堰の開放により瀬戸内海の漁業再生、汽水域の浄化作用の復活、また市民が川辺に戻る等の効果も期待できる。まさに一石三鳥の案ではなかろうか。夢のような案かもしれないが、これが実現可能か、ぜひ産学官連携で研究してほしいと議会で提案した。市内の大学や企業のどこかが手を挙げてくれないだろうか?

学校図書館を考える

宇宙滞在期間159日の野口聡一さん

経済リポート H25.5.1「祐介の目」

本を読み続けると人は人間として成長するようにできているのではないか、一冊の本との出会いが人生を決めるという事はよくあることだ。6年生の教科書を読むと、あの野口聡一さんも高校生の時に宇宙飛行士の本を読んで宇宙飛行士になりたいという思いを持ったとの記述があった。大袈裟かもしれないが、私は学校図書館の充実が将来的な福山市発展の大きな鍵を握ると考えている。

しかし、福山の小中学校には図書館司書は配置されておらず、図書館を管理する教員は忙しい上に権限もえしく、十分に機能していないという話を聞いた。司書不在の図書館は、養護教員不在の保健室と同じと言えるのではないか。図書館司書がいれば、お勧めの本を紹介する「ブックトーク」等、子供達がより多くの本に触れるような様々な取り組みができるはずだ。世間では「公務員が多すぎる」という批判も多いが、私はパートであっても司書を各学校に配置するべきと感じている。

また、多くの学校で文部科学省が要求する基準冊数は満たしているが、汚れて見栄えの悪い本や時代の変化により内容が古くなった本も多く、蔵書の新陳代謝がうまくいっていない。まるで古本屋状態の図書館がある反面、保護者らによる「図書ボランティア」の協力により、古い本を撤去して明るく開放的な図書館に衣替えをした学校もある。

蔵書のバーコード管理（電算化）や、NDC（日本の図書館における標準分類法）による分類が行われていない学校も多く、子供達が本を借りにくい一因となっている。今どき、万を超えるアイテムを紙のカードで管理している業界が他にあるだろうか?南小学校や鷹取中学校では、図書ボランティアが大変な労力を費やして電算化に取り組み、貸出冊数の大幅増加という成果を挙げた。私もせめて電算化ソフト購入の予算は付けるよう議会で訴えている。

読者の皆様にも、ご自身の子供や孫の学校図書館を一度訪問されることをお勧めする。

知事が鞆の架橋計画を撤回

フランスの路面電車

経済リポート H24.8.1「祐介の目」

7月9日、広島県主催の「鞆地区の地域振興に関する住民説明会」に参加した。残念ながら架橋を望む多くの住民がボイコットした。8年前の市長選における羽田市長の公約の1丁目1番地は「鞆港の埋め立て架橋」であり、市長を説得せずに長年にわたり架橋を待ち望んできた住民を説得することはかなりの困難が予測される。市長は政治生命を賭けて架橋を推進してきたのだから、その市長に翻意を促す知事の責任は重大だ。政治は数字や「良い・悪い」だけでは決まらない、感情にも左右されるのだ。ところが世間の評価はどうも市長に分が悪い。架橋にこだわる市長や鞆の住民を批判するのはたやすい、しかし合意が得られなければ知事のトンネル案も前進しないだろう。

ここまで書くと、大田は市長寄りだと言う人もいるだろう。しかし、私は市長寄りでも知事寄りでもない。そもそも架橋案は30年前の車社会を前提とし、街中の通過交通の排除を主眼に置いたものだ。その点は今回知事が提案したトンネル案と同じだが、車社会はすでに衰退傾向にあるということに知事も市長も気付いておられるのだろうか。今後の福山市の生産者人口は減少し、65歳以上の高齢者が増加の一途をたどる。20年もすれば車で通勤する人も観光に来る人も大幅に減る。つまり架橋もトンネルも先行きの短い計画と言える。

知事も市長も、鞆の活性化策は「観光」と位置づけているが、今後50年という長期的なスパンで観光客を鞆に呼び寄せ、永続的な産業として雇用を確保するには、公共交通の整備が有効と考える。私の案は昭和29年まで福山駅と鞆を結んでいた「鞆軽便鉄道」の復活だ。幸い駅前から水呑まで4車線となっており、軌道を敷設するスペースはある。広島駅から宮島まで走る民営の広島電鉄と同じイメージで良い。ラッキョウ列車の形をしたLRT（路面電車）が田尻の坂を越え、瀬戸内海に浮かぶ仙酔島が見えた時の素晴らしさは宮島線を超えるのではないか。

スポーツで福山を盛り上げる

第8回大田祥子杯で優勝した福山リトルシニア

経済リポート H24.9.1「祐介の目」

今年の夏はロンドンオリンピックと高校野球のおかげで「熱い」夏となった。メダリストや甲子園代表校を輩出した町は大いに盛り上がった。福山市出身の選手も柔道の平岡選手（近大附属高）が銀メダルを獲得したが、マイナースポーツで脚光を浴びるにはオリンピックでメダルを取ることであり、次回のリオデジャネイロでは、飛び込みの新良貴選手（葦陽高）に期待したい。高校野球においては盈進高校が県大会決勝で敗れたもののあと一歩であった。福山市内の高校が甲子園に出場したのは平成元年の近大附属福山高校が最後であり、以後23年間にわたり出場が途切れている。私は福山市の高校が甲子園に行くことが町を盛り上げる大きな起爆剤になると考えている。

7月14日に行われた都市対抗野球ＪＦＥ西日本対日立製作所の試合を観戦したが、倉敷市長・福山市長をはじめとする大応援団が東京ドームに参集し、オレンジ一色の日立の応援団と応援合戦が繰り広げられた。試合は手に汗握る接戦となり、ＪＦＥ西日本の逆転勝ちで幕を閉じた。福山からの大応援団は大いに盛り上がったが、同じことが甲子園において実現したら素晴らしいだろう。そのためには中学生の硬式野球チームを強化することが、市内高校の甲子園への近道と考える。

私は10年前に結成された「福山リトルシニア」の支援を行っているが、当初はお話にならないほど弱かった。しかし今年は初の全国大会出場を果たし、チームの主催大会である「大田祥子旗争奪野球大会」において初優勝も遂げた。そして卒団生が盈進高校へも進学するようになったが、正田監督と交わした「盈進に良い選手を送り込む」という以前からの約束がやっと実りつつある。

名選手を輩出するにはそれなりの土壌と支援体制が必須だ。選手の支援だけでなく、グランド等の施設整備やボランティアの監督・コーチに対する支援も行い、いつの日か福山からもイチローが誕生してもらいたいものだ。

ジェネリック医薬品の勧め

経済リポート H24.10.1「祐介の目」

ジェネリック（後発）医薬品とは、特許が切れた先発医薬品を他の製薬会社が製造する医薬品である。両者の効能は基本的に同等という前提のもと、欧米におけるジェネリックの普及率は60～70％を占めている。その理由は、ジェネリックの薬価は先発医薬品の概ね半額程度となり、患者の自己負担額、医療保険の負担額ともに激減するからだ。対して日本では20％程度、医療センターのように積極的に採用している病院もあるが、福山市民病院に至っては8％でしかない。

福山市では今年の3月から「あなたが飲んでいる薬をジェネリックに変更したら、自己負担額がこれだけ安くなりますよ」という差額通知事業に取り組んでいる。日本人の気質（医師との人間関係を尊重、高い薬の方が効く気がする）も理解できるが、医療機関に行った際はぜひジェネリックへの処方の変更を申し出てはいかがだろうか。院外処方箋を調剤薬局に持っていった際でもかまわない。治療効果が同じであれば、患者の自己負担の軽減に取り組む医療機関や調剤薬局こそ評価されるべきだろう。

福山市国民健康保険の予算は460億円、保険料も上がる一方だ。予算のうち約130億円が薬剤費と推計されるが、ジェネリックが普及すれば数億円単位の節減が可能となる。ぜひとも医療保険財政の健全化にご協力いただきたい。また、生活保護費予算は130億円その約半額は医療扶助費であり、うち20億円程度が薬剤費だ。これもジェネリックにより大幅節減が可能となり、不正受給対策よりはるかに効果がある。

我が国の社会保障制度が揺らいでいる今、消費税増税に多くの国民はしぶしぶ納得した。しかし、医療は非課税であり、医薬品にかかる消費税は国民に代わり医療機関や調剤薬局が負担している。増税の前に医療機関としてもジェネリックの普及促進が必要ではないか。アメリカ人には効くが日本人には効かないジェネリックは無いはずだから。

フィリピン留学の勧め

海兵隊ルックの息子

経済リポート H24.11.1「祐介の目」

私事で恐縮だが、中1の息子が現在フィリピンの姉妹都市タクロバン市の学校に留学している。最初にフィリピンの学校を選択した理由を説明したい。まず、日本から最も近い英語圏の国であり、シンガポール特有の「シングリッシュ」よりはるかに綺麗な英語である。また、タクロバンのあるレイテ州は教育熱心な地域であり、教育レベルも問題ない。次に渡航費及び物価が安いこと、子供一人なら月々3万円で十分生活できる。治安を心配する向きも多いが、タクロバンはのどかな田舎町だ。さらに時差が1時間しかなく、Skypeで気軽に連絡が取れるのでホームシックも防げる。

かわいい子には旅をさせろ、と送り出して4ヶ月目、学校の運動会の見学のためにはるばるレイテを訪問した。運動会は学校最大のイベントであり、印象的だったのは子供達による軍事教練さながらのダンスだった。軍服風のユニフォームに身を包み、木製銃を担いで踊る様子は「格好いい」の一言だった。日本では考えられないが、フィリピンでは軍隊は身近な存在であり、北朝鮮のような強制的な雰囲気もなく、運動会を通じて自然に愛国心や国を護る気持ちが醸成されているように感じた。

運動会にて息子の同級生や保護者との触れ合いを通じて感じたことは、誰もがとてもフレンドリーなことだ。過去の戦争の歴史も水に流し、今では大変な親日国と言える。一例として、息子の同級生宅に夕食に招待された際、85歳の祖母は戦時中のドラグ市の市長の娘であり、キャプテン・ヤマソエに可愛がってもらったと日本語を交えながら話された。ドラグの警備隊長・山添勇夫大尉は現地住民からの人望も厚く、戦死した大尉を偲ぶ慰霊碑が住民の手により建てられているという。

ということで、息子はすっかり現地に馴染んでおり、日々楽しく過ごしている様子だった。このような交流を多くの福山の子供たちに経験してもらいたく、来年は夏休みを利用したホームステイ等の企画も考えている。

ふくやま競馬 存亡の危機

馬上は41連隊の連隊長

経済リポート H24.12.1「祐介の目」

現在の緑町公園に福山歩兵第41連隊があった頃、年に一度の一般開放の日があったそうだ。「軍旗祭」には多くの一般市民が訪れて、将兵達との交流を深めた。最大のイベントは軍用馬を使った競馬であり、年配者の中には未だに当時を懐かしむ方がいらっしゃる。思いおこせば、はるか戦国時代より武人と馬は切っても切れない関係であったし、農家にとっても農耕の主力は牛馬であり、まさに家族の一員であった。

戦後、モータリゼーションの進展や農業の機械化により、馬は競馬場でしか見ることがなくなった。私は競馬場近くの沖野上町で育ち、多治米小学校に通ったが、競馬場の外を散歩する馬を追いかけ、同級生を訪ねて場内に入り込んで遊んだものだ。馬の持つ魅力は犬や猫など遠く及ばないのではないか。

30年前の最盛期、競馬開催日には周辺は車と人であふれ、年間の売上は300億円を超えた。累計400億円を超える一般会計への繰り入れを果たし、学校等の多くの公共施設建設に充当された。福山市の戦後復興に多大な貢献をしたが、いつの頃からか競馬は単なるギャンブルと捉えられ、周辺は刑務所のような高い塀で囲われ、臭いを出す迷惑施設として位置づけられた。

競馬事業は18億円余の累積赤字を抱えているが、1000億円を超える下水道事業債と比較すれば微々たる額ではないかという気もする。しかし、単年度収支均衡という至上命題がある以上、これ以上の赤字を垂れ流すわけにもいかない。唯一の望みであったインターネットによる馬券販売も売上全体の底上げとはならず、今年度上半期の赤字はすでに2000万円を超え、施設も老朽化し、来年度予算の編成は困難として事業廃止の見込みが濃厚だ。

長きにわたり続いた馬と人間の共存共栄文化が今まさに閉じられようとしている。市長、議会、関係者一同、一つの歴史を断絶させるという覚悟をもって対処する必要がある。市民の皆様も今一度競馬場にお越しいただき、最後の一花を咲かせてほしい。

創エネと省エネのススメ

ペレットストーブ

経済リポート H25.1.1「祐介の目」

先の衆議院選挙において、原発と今後どのように付き合うかという大きな争点があった。即時脱原発・卒原発・原発フェードアウト等、様々な政策が打ち出された。私は、原発は核兵器と同じ「必要悪」だと考えている。必要悪だからできれば減らしたいと思うが、化石燃料に過度に依存することもリスクが大きい。選挙の結果を見れば、民意は性急な脱原発を拒否したと言えるだろう。

私は「創エネ」として、我が家にシャープのソーラーパネル・寺田鉄工所の太陽熱温水器・小畠の薪ストーブを設置し、再生可能エネルギーをできる限り導入している。反対に「省エネ」としては、エアコンは熱帯夜のみ使用し、猛暑の日は水路の水をポンプアップして庭に散水して凌ぎ、主たる移動手段は自転車、車は薪を運ぶためにトラックにした。別に苦痛ではないが、もう趣味の世界であり、これだけしてもエネルギー自給自足にはほど遠いのが現実だ。しかし、自転車は健康にも良いし、薪ストーブの炎は癒し効果満点であり、大いに満足している。

以上のように、国民の多くが進んで今のエネルギー大量消費型のライフスタイルを変えなければ脱原発は不可能ではないか。そうは言っても、徐々に原発からシフトしていく事は必要と多くの国民は感じている。そのためには政策的誘導が必要であって、代表的な例が自然エネルギーの「固定価格買い取り制度」だろう。瀬戸内の長い日照時間を有効活用しようと、メガソーラー建設が活発化している。福山市も車社会から自転車の似合う街への転換策として、駅前通りに自転車道が整備されたし、尾道市では電動アシスト自転車の購入補助制度、広島市では「のりんさいくる」という地域の自転車を共有する社会実験を実施中だ。神石高原町や庄原市にはバイオマス熱利用として、ペレットストーブの購入補助制度がある。

国民の一人一人がエネルギーに対する意識を変えるという、その覚悟を持ちたいものだ。